

アウグステイヌスにおける「貧困」、「病」そして「老齡」

出村和彦

はじめに

貧困、病、老齡の三つを並べてみると、経済的成長優先、健康志向、アンチエイジング施術等が喧伝される世相の中で、ダブルパンチ・トリプルパンチの災難に見舞われて社会の隅に追いやられている存在が思い浮かぶ。またこれらを絶対的尺度だけで測ると、相対的な貧困、慢性的な不具合、緩慢な機能低下などが見えなくなってしまうという危険もある今日、これらの本質的説明は科学が正面切っ取り上げるべき課題である。貧困、病、老齡という不如意な状況は、単に誰でも何等かそこに置かれるという意味

で偶発的なものに留まるものではなく、むしろ人間の普遍的な条件として考えなくてはならない。アウグステイヌスの自己や人間一般に対する洞察は、何をもって「(貧) 乏」「(病) 弱」「(老) 衰」とみているのか。これを包括的に考察する試みはこれまであまりなかったと思われる。以下、本稿ではこれらを指標にして彼の自己理解・人間理解の特徴を論じていきたい。

一、アウグステイヌスの「貧困」

アウグステイヌス(三五四―四三〇)は、「貧困」にどの

ように関わっていただろうか。P・アレン&E・モーガンの研究が明らかにしたように、アウグスティヌスに特徴的な関わりは、古代末期になつてようやく社会的に可視化されてきたとされる「貧困」という事態に対して、彼の働きはその〈現状〉*status quo*を変へるものではなく、むしろ、レトリカルな表現のうちに、人間としての精神的な再構成を求めたものであった。¹例えば、『説教』において当時の会衆に語りかける中で、その勧めの要は貧困の撲滅解消という改革ではなく、貧富の差の現状は現状として、その中で貧者も富者もともに、よく生きる人としての「徳」が問われたのである。²その際にアウグスティヌスはあくまでも貧者の側に身を置くものとして自分を規定している。たとえば、最晩年の四二六年一月（七一歳）の『説教三五五』で、自らの生涯を振り返ってヒッポの会衆に向つて、

私は神の恩恵によりあなたがたの前に司教として立っています、多くの方々がご存じの通り、私は若者であつたときにこの町にやってきました。修道院を建ててそこで兄弟たちと共に暮らす場所を求めてのことです。というのも、私はこの世的な望みをすべてうち捨

て、私になれたであろうところの「この世の栄達の」境遇は求めなくなつていきましたが、しかし、私が今ある「司教としての」境遇を求めていたわけでもなかつたのです。……しかし私は捕らえられ、司祭に挙げられ、さらに司教となつて今日に至つています。私は何も持たずにやってきました。私はこの教会にその時着ていたものだけをまといつてやってきました。私が計画していたのは同志たちと修道院を作ることでしたが、司教ヴァレリウスは私の望みと計画を受け入れ、今修道院が建つている一区画を提供してくれたのです。私は善意の兄弟たちを集め始めました。かれらは私と、貧しさを分かち合う者たちであり、私と同様に何も所望しない生活を模倣する者たちでした。私がこの貧しい男の（故郷の）ちっぽけな土地財産を売り払い貧者たちに分け与えてしまつたように、私と共に生活することを望む者たちは同様にして、私たちは共有のものによつて生活することになつたのです。しかし私たちが本当に共有している偉大で有益な財産とは、他ならぬ神ご自身であります（傍点筆者）。

と告げている。³引き続き、『説教三五六』では、

わたしに関して言えば、ご存じの通り、私の持っているものは何でも共有のものとしようとしているのである。私物化して私だけが用いることができるようなものを皆さんからいただきたいとは決して思わないのです。たとえば、たいへん高価な上着が贈呈されているのですが、それを着るのは司教に相応しいものではない。しかし、このアウグスティヌス、すなわち、貧しい両親から生まれた貧しい人間であるこのアウグスティヌスが着るには相応しくないので。

と述べているのである。⁴アウグスティヌスはしかし、実際は「アフリカ州のタガステ市において、市会議員をつとめていたキリスト教徒で、人々から尊敬されていた両親から生まれた」⁵のであり、その限りけつして「貧しい出自」とは言えないのは事実である。そのようなアウグスティヌスが、晩年になってから振り返ってみて、かつても今も後半生通じて「貧しい者 (pauper)」として自己を語っていることをまず確認しておきたい。単に、貧しい出自であると

かをもつてアウグスティヌス自らが「貧しい者」というのではないならば、私有財産を放棄した修道者であるということとを表現しているのであろうか。

確かに、「故郷の」ちっほけな土地財産を売り払い「何も持たずに……その時着ていたものだけをまとつて」「私と同様に何も所有しない生活を模倣する者たち」と「共有のものによつて生活する」というのはそのことを言っているように見える。アウグスティヌスたちの共同生活を反映し、これを律していたと思われるアウグスティヌスの『修道規則 *Præceptum*』（のちに『アウグスティヌス会則』として広められる規則）は、『使徒言行録』の初期のキリスト者たちの共同生活を目指すように指示されていることはその証明である。『規則』には、

まずあなた方が共に寄り集う主な目的は、神にあつて心も思いも一つにして、家でむつまじく生きることで

す。
何物も自分の物とは言わないで、すべての物を共有にします。……それはあなた方が『使徒言行録』に読む通り「四・三二」、「彼らはすべての物一切を共有にし

おのおの必要に応じて分配していた」からです。

と指定されている。⁶⁾しかし、それだけのことをもってこゝでの共同生活そのものを「貧しい」とは表現していない。アウグスティヌスはあくまでも、自分という「貧しい人間」と「貧しさ」を分かち合う兄弟たちと規定しているのである。ゆえに、まずアウグスティヌスの「貧困」に関する洞察があつて、それにかなう生活形態として私有を放棄し共有生活に入るといふことが形成されているのであつて、その逆ではない。事実『規則』では、出身階層の貧富の違いによる生活の質の違いについての配慮や、健康の保持や病気からの回復については細心の注意が払われている。

『告白』第一〇巻において『詩編』一〇八・二二を引用して「私は乏しく貧しい (egenus et pauper ego sum)」と、司教である自らの状況を「貧しい」と表現していることは注目に値する。

私は、乏しく、貧しい。いくらかましな者となるのは、自分に不満を感じてひそかのため息をつき、あなたのあわれみを乞い求めながら、自分の欠陥が修理され完成

されて最後の平安にいたる日を待とうという気になるときだ。⁷⁾

多面多岐に渉るアウグスティヌスの貧困に関する言行のうち、本章ではまず『告白』でアウグスティヌス自らを「貧しい人間」ととらえている位相を確認したい。確かに『告白』第一〇巻の終わりでは、アウグスティヌスは自らを次のように「貧しい者」と規定している。

あなたは、私の未熟と弱さを知りたもう。教えたまえ、いやしたまえ。かの独子が——知恵と知識とのすべての宝はこの方のうちにかくされています——血によつて私をあがなってくださいだったので。たかぶる人々よ、私をそしめるのをやめてくれ。私は自分の贖いの値をよく考え、それを食べ、飲み、分かつのだ。そして、それを食べ、飽き足りる人々にまじつて、貧しい、一個の人間 (pauper)として、自分もまたそれに飽き足りた⁸⁾と思つているのだ。まことに、「主をもとめる者こそは、主を讃えん」。

ここでは、「あなた」と呼びかける神の豊かさと一緒に飽き足りることのできない「私」の欠乏の貧しさがはつきりとした対比のもので示されている。また、「知恵と知識とのすべての宝がこの方のうちにかくされている」(コロサイ二・二)という御子の充実と豊かさとの未熟さと弱さの対比もこれに並行する。しかもこの対比の両極は単に分断されているのではなく、神からは私は「知られ」「癒され」「贖われる」関係が結ばれ、私からは神を「いただき」「求め」「讃える」という志向が示されているのである。しかもそのような志向をする多くの人びとに交わって、その中であつていわば後塵を拝する形でこれに連なる謙遜なあり方を指して「貧しい」一人の人間と言っているように見える。ただ見逃してならないのは、その「貧しさ」は消極的なものではなく、かえって、神からの働き掛けを受けられる大きさ、神へと志向してこれを求めほめ讃える強さの純粹な姿の現れでもあることである。実にこの世での欠乏はかの世での充足を志向するからである。そのような「貧しい」がゆえの神志向の強さ、言い換えれば、知恵と知識がすべてそこに隠されている知恵そのものの真理そのものである神(御子)を愛し求め、それを求めることに

よつて真の充足、真の幸福を得られるという、すぐれた意味での「哲学(=知恵への愛 amor sapientiae)」のブレのない志向を示す方方がここに見据えられている。アウグスティヌスにあつては一九歳の時の「ホルテンシウス体験」以来、哲学は神に立ち戻る道であり、本当の幸福——これこそ誰もが本心に願う志向するもの——をもたらずものであつた。神に飢える貧しさは、神である知恵を愛するという仕方で神に立ち戻り、これにひたむきになるというあり方だとすれば、それは「神に仕える」という生活のあり方として「貧しさ」がとらえられているとも言えよう。貧しいことの自覚から神を求め、それが神に仕える (carere) こととして「貧しく生きる」ことを現実化させているのがアウグスティヌスである。

確かに、ミラノ時代、神に仕えるものとなる願望は、「ヴィクトリヌスは幸福な人だと思いました。なぜなら彼は、あなたに完全に仕える機会を見出したのですから」という仕方で表明され、「幸福」と「神に仕えること」がリンクしてきている。その心の動きについて、

ただあなたのために、あなたに仕え、あなたを享受

(tri) したいという新しい意志 (voluntas nova) が——
神よ、ただあなたのみが確実な喜びです (Deus, sola
certa iucunditas) ——心のうちに起こり始めていまし
た。私はいつもの生活をつづけていましたが、不安は
つづるばかり。日ごとにあなたをあえぎもとめながら、
仕事の重圧にうめきつつ、あいまをみてはあなたの教
会をしげしげと訪れていました。

とも述懐されている⁽¹⁰⁾。回心への道が、神に仕える道への意
志の選択として記述されていくのである。それがまず先鋭
化された形で理解する (intelligere) にいたったのは、上記
ヴィクトリヌスの回心を受けての『告白』八・五・一〇で
の「新しい意志」と「古い意志」の二つの意志の葛藤の記
述であり、さらに周到にそれらの意志の機微を記述してい
るのが、回心直前の「心という密室」の中での出来事を記
述する長い省察のくだりである (八・八・一九—八・一一・
二七)。両者を通じて、一方の「新しい意志」は「ただあ
なたに仕え、あなたを享受したい意志」であり、「あなた
にひたすらに従っていくこと」「久しく志ざしていたよう
に、いよいよ主なるわが神に仕える身になろうかなるまい

かと思案していたとき、欲していたのは私ですが、いとつ
ていたのも私で、しかも欲する私という私とは同じ私で
した」と一貫して観察されているのである。

そのように、「貧しさ」と「神に仕えること」の志向、
その究極としての知恵を愛する「幸福」を目指すという基
本線を見据えた時、トリリアの廷臣・アントニウスの出家
とアウグステイヌスの回心の重ね合わせと相異は示唆的
である。まず、アウグステイヌスは状況を次のように記述す
る。

とある小屋に立ち入りました。そこには、「天国は彼
らのためである」といわれた「心の貧しい」あなたの
しもべたち (servi tui spiritu pauperes) が数人住んでい
ました。そこで彼ら「トリリアの二人の廷臣」はアン
トニウスの生涯を記した一冊の書物を見つけたのです。⁽¹¹⁾

そして、彼らの一人は中に入りその書物を読んで感激し、
読みながらこの世に宮仕えをやめてあなたに仕えたいと思
い立ち、「私(＝廷臣のひとり)はもう、あのわれわれの希
望を断念した。神に仕える決心をした……」と告げて、こ

の僕たちの生活に合流することにしたというエピソードになっている。後に、アウグスティヌス自身の「取れ読め tolle lege」の回心の出来事（三八七年夏）を物語る時に、このエピソードが想起されて、

じつさい私は、たまたま来合わせた教会の福音朗読で「行つて、汝の有するすべてのものを売り、貧者に施せ。さらば汝は天に宝を得るであろう。そして、来たりて、われに従え」と読まれることばを、あたかも自分に対する忠告であるかのようにうけとり、そのお告げによつてただちに御許に立ち返つたというアントニウスのお話を聞いていました。

と注記されている。本稿では、その文学的構成の問題には立ち入らない。ただ、（心の）貧しい者であること¹²神のしもべであること¹³神に仕える者になるといふ両者の人生の転機の顕著な類似の中にあつて、廷臣では、神に仕えること¹⁴キャリア放棄¹⁵修道者・出家となつているが、アウグスティヌスでは、貧者への財産放棄は第一義的要素にはなつていないし、修道院に入るといふことも明示されてい

ないのである。アウグスティヌスにおいてはただ放棄すれば良いというものではなかった。事実、回心後ミラノのアンプロシウスの修道院に入ることもなく、彼はミラノの友人やコネクシヨンの後ろ盾の下にカッシキアウムでの閑暇を家族や弟子と過ごし、アフリカに帰る途上ローマに滞在している時に訪れたであろうローマの修道院にはちよつと距離を置いて、これに参加していないことも、彼において「貧しい者」として神に仕えることが独自の仕方であつていたゆえであろう。実際彼が故郷の土地財産を放棄するのは、先に示したように、ヒッポで司祭に挙げられて（三九一年）、司教から協働生活の住居が与えられてのことである。

アフリカの故郷に帰つて、仲間と神のしもべ (servi Dei) の一員として始まつた彼の貧しい者としての生活は、司祭となりさらに司教として活動する一〇年後（三九七年）新たな次元に到達する。神への垂直的な志向に固められる生き方から、これを神からいただいたものとして同じ旅人としての隣人たちに仕えるという仕方でも水平的に広めていく志向が自覚されている。『告白』第一〇巻はそのようなしもべたちに仕える自分を皆の前にさらしているのである。

こゝでは、

あなたを信ずる人の子ら、私とともによるこび、死の性を共有し、同じ国の市民であり、旅の道づれである人々、私に先立っていき、同じ時代に生きるすべての人々の耳にも聞こえるようにしようと思うのです。この人たちはみなあなたのしもべであるとともに、私の兄弟です。彼らがあなたとともに私の主となることをあなたはお望みになり、もし私があなたとともにあなたによって生きようと思うならば、彼らに仕えながら、生きねばならないとお命じになりました。この御言は、ただ語られ命じられるだけで、実行による範をお示しにならなかつたならば、私にとってたいした意味がなかつたかもしれませぬ。しかし、実行によって範をお示しになりましたから、私もまた、言葉と行ないをもつて実行するのです。

と告白されている。¹³ここでは、一つの心のキリスト信徒の交わり・協働体（エクレーシア・キリストの肢体）のわれわれのなかで、その一人一人に仕える者としての在り方を

「貧しさ」として表現していると思われる。それは人間となったキリストの謙遜 (humilitas) を「貧しさ」ととらえることに重なる。そのうえで、仕え方はさまざまであるように思われる。アウグスティヌスは、説教を通じた会衆への働き掛けも、教会会議の運営も、司教裁判の裁定も、同僚との暮らしの秩序付けも、とりわけ、学問探求・出版活動（聖書注釈やその他著作の執筆、書簡による応答）も、「仕える者」としての貧しさを生きるというところで統一されているのではないだろうか。

二、アウグスティヌスの「病」

しかるに、生きていく人の現状として、常に忍び寄り寄り添うものに病と老いがあった。生涯にわたってアウグスティヌスの身に帯びたこの二つの〈現状〉は彼と切っても切れないものである。実際、アウグスティヌスは、「まだ子どものころ、ある日突然に胃痛で熱を發し、あやうく死にかけた」と言われている。¹⁴ただしこの時は緊急洗礼が施される直前に回復した。また、若き日の友人との死別の苦しみでは、その病状が詳しく記述され、「友人は熱病に苦

しんで、……私のいない間に熱がぶり返し、なくなってしまうた」のち、「この悲しみによって、私の心はすっかり暗くなり、目につくものはすべて死となってしまうた。：いまや、自分自身が自分にとって大きな謎となってしまうた (factus eram ipse mihi magna quaestio)」というように受け止められている。¹⁵⁾

さらに、母を裏切ってカルタゴを出奔した時、ローマに着いた彼は、大変消耗して心身に変調をきたして、これについて

私は、身体の病、と、い、う、答 (flagello aegritudinis corporalis) をもって迎えられ、自分にたいし、他人にたいし犯したすべての悪を身に負うて、あやうく地獄へ行くところでした。それらの悪は、われわれすべてがアダムにおいて死ぬ原罪のくびきの上に、ずっしりと重く増し加えられていたのです。

と記している。¹⁶⁾

それはどういうことなのか。

アウグスティヌスの医学に関する知識について、H・

I・マルーは、

ローマの教養人たちは医学にも関心を寄せ、ヴァロ、ケルルス、プリニウス、アプレイウスなど百科全書的な主題を取り扱う著述家たちは、その博識を集めた「総合的な著作」(corpus)のなかに医学も取り入れている。アウグスティヌスもそうした伝統に連なるようである。彼は、厳密な意味で医学を学んでいない。しかし、「侍医」(comes archiatrorum)でアフリカの前執政官であり、占星術について彼と議論したことのあるヴィンディキアヌスのような医者と交流があった。アウグスティヌスは医者との会話や自分でひもといた若干の医学書をとおして、また読書のなかで見かけた断片的なことをとおして医学関係の知識をいくつか身につけている。¹⁷⁾

と指摘している。アウグスティヌスがその知識をいかに用いているかは注目に値する。たとえば、第六巻の冒頭で、「もはやマニ教徒ではないが、かと言ってカトリックのキリスト教になったわけでもなく、「私が真理の発見へ

の絶望の淵に立たされ重大な危険に陥っているのを母に見いだされた時」¹⁸、そのような不安動揺の状態に (*ad illam ancipitem fluctationem*) まで導かれたのもアンブロシウスのおかげであるとその母が指摘するくだりで、彼女の理解を解釈する形で、

この状態を通して病気から健康へ移るであろうが、そのためには、医者が危機 (*critica*) と呼ぶ、いわば発作のようなものによって、もっと切迫した危険の時を経過しなければならぬということを、確信をもって予期していたのでした。

と記している¹⁸。

むしろ、その切迫危険の時こそやがて訪れる回心の時であるが、これを敢えて危機 (*critica*) といった医学用語を自覚的に用いて、その時の状態を「病から健康へ (*ab aegritudine ad sanitatem*)」の転機のいわば「症例」として記述している。J・オドネルは、術語としてアウグステイヌスがこの語を導入しているが、*critica* は通常の用例ではないと『ラテン語用例集 *Thesaurus Linguae Latinae*』

(TLA.1211) を引いて、「この語がアウグステイヌスの聴衆にどれほどなじみのあるものであったろうか」と疑問を呈している¹⁹。「分利 (*crisis*)」というべきところを「危機 (*critica*)」というあたりアウグステイヌスの医学知識自身にも問題があることを露呈しているとも言えようが、ともかく、彼が自らのミラノでの最初期 (三八五年三一歳) の状態が、そのような危機の前兆の不安状態として診断されるものとして記述していることは明らかであり、それは『告白』の記述として大変効果的である²⁰。

『告白』に現れる病に関連する語とそのルイス&ショートの『ラテン語辞典 *A Latin Dictionary*』の訳を以下のように挙げる²¹ことが出来る。

- *languor* faintness 力なき弱々し²² *febleness*, weariness, sluggishness 鈍²³不活発²⁴ *languor* けだるさ重苦し²⁵ *lassitude* 脱力感
- *aegritudo* illness 病氣 sickness 不快 *grief* sorrow 悲哀
- *morbus* a sickness disease 病氣 *disorder* distemper illness, malady

- *pestis* a deadly disease 死に至る病
- *infirmias* infirmity 弱xy

たとえば、回心前の意志の葛藤の苦しみについて、このなかば意志してなかば意志しないありかたを「精神の病 (*aegrifudo animi*)」と指摘する。「精神は」⁽²¹⁾では、真理によって上方に引き起こされながらも、習慣によって抑えつけられているために完全に起き上がることができないでいる」という記述はその診断である。他方、何か弱さとしての「病 (*languores*)」は第一〇巻での司教としての現在の自己の状態を診断するところで頻出する。

若きアウグステイヌスの「私が自分自身にとって大きな謎になった」という表現は、司教のアウグステイヌスにおいて、「しかし主よ、わが神よ、私の祈りを聞き、かえりみ、みそなわし、あわれみ、いやしたまえ。御目の前で、私は自分自身にとって謎となりました。それこそまさに私の病なのです (*in cuius oculis mihi quaestio factus sum, et ipse est languor meus*)」というように繰り返され、しかもその「私の謎」が「私の病 (*languor*) である」と捉え直されてきている。⁽²³⁾ 以下、第一〇巻では「病 (*languor*)」が頻出

する。たとえば、司教になった今も彼が身に帯びている三つの欲望(目の欲・肉の欲・世間的野心)についての第一〇巻の後半での省察は、

そこで私は、三種の欲望のうちにあらわれてくる自分の罪の病を考察し (*languores peccatorum meorum in cupiditate triplic*)、いやしのためにあなたの助力を乞い求めました。私は傷ついて心であなたの輝きを見ましたが、うち退けられていました。『誰がそこに達することができのだろうか。私はあなたの眼前から遠く投げ捨てられた』。あなたは万物をこえて万物を支配したもう真理です。

と⁽²⁴⁾いうように、「自分の罪の病を考察し」「すべての病 (*omnes languores*) のいやし主」の真理を求めるものとして遂行されている。すなわち、

しかしながら、人々がそれを手本にして謙遜を学ぶように、かくれたあわれみによってあなたが人々のもとに遣わし示したもうた真実の仲介者、それこそは神と

人との仲介者なる人間イエス・キリストであります。²⁶

この方は、あなたから生まれながら私たちに仕え、それによって、奴隷であった私たちを、あなたの子にしてください。自分の持つすべての病を、あなたはこの方をおしていやしてくださいであるという強い希望 (spes... quod sanabis omnes languores meos per eum) を、私はこの方にかけていますが、それは当然です。この方はあなたの右に座し、私たちのためにとりなしてくださいるのであります。さもなければ私はまったくのぞみを失うことでしょう。²⁶

そしてさらに、

ああ、私の負っている病は、数多く大きい。まことに、数多く大きい。しかしあなたの薬の力はそれよりももっと大きい。もしも御言が肉となり、私たちのあいだに住みたまわなかったならば、御言は人間との結びつきとははるかに縁遠いものと考えて、私たちは自身に絶望してしまっただけかもしれません。

とまで言われている。²⁷ ここでアウグスティヌスが告白する「数が多くて大きな病 (multi et magni languores)」の具体的な事柄がなんであるはとにかくとして、司教の現在の状態を一貫して「病 (languores)」を身に負ったものとして記していることは確実であり、それは回心や洗礼で癒された「病」としての aegritudo や morbus とは別種のとらえ方がされていることも重要である。

そのように自己診断する記述の焦点は、もちろん、そのような病を癒す方としてのキリストにあることは言を俟たない。概して、救済論には、医者であるキリスト (Christus medicus) の医療モデル、贖罪論には負債帳消しの経済モデル、義認論には審判の法律モデルが、それを論ずるにあたっての一般的なトポスであるということは当然である。しかし、『告白』固有のこととしてそもそも第一巻での実質的な神探求は、「わが神よ、あなたはいったい何者であるのか」と問い掛けから始まり、ひとまず「あなたは主なる神以外の何物でもない」ことが強く肯われつつ、ほとんど否定神学的とも言える探求が、

ああ、どうかあわれみをもって、主なる神よ、語り給

え。そもそもあなたは私にとって何者であるかを。わが魂に向って語り給え、「われは汝の救いなり」と。そのように語り給え。聞くことができますように。²⁸⁾

という祈りに極まっていることを思い起こせば、「救い」としての癒しは『告白』の通奏低音であったと言える。それだからこそ、実にアウグスティヌスは周到に「病」の状態を表す単語として、*langor* と *aegritudo* を使い分けつつ、『告白』における自己を、急性期（回心まで）、回復期（回心直後Ⅱ第九巻）、慢性期（キリスト者・司教として生活している今Ⅱ第一〇巻）の病にある者とはつきりと分けて診断していると言えよう。そして忘れてはならないのは、——それ自身は「謎」としか言いようがないか——人間はその自己を真摯に見つめればそこに自覚されるのはいつも病んでいるということである。そして、病人であればこそそこに本当の医療が必要になる。前章で、貧しい者が真に満たされるのは人間を越えた神に仕え神を愛する（Ⅱ知恵を愛する）ことを主軸にする相を見てきたが、アウグスティヌスにおいては、人間は本当の幸福を求めてやまない「貧しい」存在であるのみならず、本来「病んでいる」のであつ

て、それが本当に癒されるのもそのように人間を越えた何者かを求め、救済・治療の働き掛けを強く待ち望んだ在り方に披かれた時になされると考えられているのである。

三、アウグスティヌスの「老齢」

最後に、アウグスティヌス後半生の『書簡』やポッシデイウス『アウグスティヌスの生涯』の最晩年の記述、およびP・ブラウンの『アウグスティヌス伝』で取り上げるアウグスティヌスの老年観などを検討しながら、晩年まで至るアウグスティヌスの一貫した人生のとらえ方を考察したい。

そもそも「老い」は病気ではない。しかし、なにかままならぬ不如意なもの、活動の妨げになる弱さ等々、受け止めがたい事態とも言える。しかし、キリスト教ではこれままであまり取り上げられてこなかったように見える。ユダヤ教では族長らの長寿の価値が繁栄や幸福の象徴として前提されている。またキリスト教文学のうちで修道文学での長老の位置づけが重要なのは言うまでもないが、これはどうしたことであろうか。そもそもキリスト教が三〇歳台のイ

エス・キリストの生涯に注視しその十字架の死と復活の希望の宗教なのだから、老年は扱いきいのだろうか？⁽³³⁾

ブラウンはアウグステイヌスの晩年の思想の変化と彼の生きた後期ローマ帝国の変化を重ね合わせて「世界の老齢化」というテーゼを語る。高齢者が多い老齢化社会というのではなく、世界すなわち老いも若きも生活する人間社会全体が老齢化の兆候を顕在化させていくという時代認識を言う。それは、

あなたがたは、最近、世界がよく分からなくなつたと驚いておられるかも知れません。世界が年老いてきていると感じておられるかも知れません。人間のことを考えてごらん下さい。誕生し、成長し、老いていきま

す。老年には不満が多いものです。咳き込んだり、震えがきたり、目はかすみ、不安に苛まれ、すっかり疲れやすくなるものです。人間は老いていきます。そして不満でいっぱいになります。この世界も老いていきます。それは押し寄せる苦難に満たされています……

というようなアウグステイヌスの説教からうかがわれると

される。⁽³³⁾

四一〇年八月二四日永遠の都ローマが蛮族によつて略奪されるといふ前代未聞の報に接し、またドナティスト分派対策の協議会の後ろ盾であつた友人の高官マルケリヌスが反乱陰謀の廉で処刑されるという悲嘆極まる出来事を六〇歳になろうという時に経験して、ブラウンによれば、「アウグステイヌスはより用心深くなつていた。……実際、アウグステイヌスは、老いて無力であることを実感していた。彼は、書物に囲まれた安全地帯であるヒッポに戻つた。彼は『私はもし主が望まれるならば、私の全時間を、教会の教えを分かち与えるための研究の仕事に捧げようと決心しました……』と書いている」といふのである。⁽³⁴⁾

これらを通じて、ブラウンは「アウグステイヌスは老人になつていた。彼の健康は衰えていった。天の国の将来を語る彼の説教は、根本的な希望と恐怖とに触れることになつた人間の語調を持つてゐる」と判定する。⁽³⁵⁾ アウグステイヌス晩年の作品の中に、「すでに、大破局を予感させる秋の冷え込みを感じる」と特徴づけて、恩恵の絶対性や予定説の考えに固められてペラギウス論争を導いていく彼の立場を「老年」といふことから説明している。四〇代に

『告白』を書いたときには、人格の中に人間を越えた「知られざる領域を意識することは、人間性の存在を保証するもののように思えた。今や、このような不確実さは、深刻な恐れを強めるものとなった」とまで言っているのである(傍点筆者)。本稿の第一章第二章で考察してきた人間の境涯を「貧しい者」「病んだ者」と自覚することから披かれたあり方が根底から突き崩されている恐怖感を持たせるブラウンの筆致は印象的である。

本稿で最初に引用した『説教』三五五および三五六をした四二六年、七二歳の彼は引退を決心して司祭エラクリウスへの事務引き継ぎを告げた時の説教の記録によれば、次のようにヒッポの会衆に語り掛けて、

この人生において、私たちはすべて死ぬように定められています。そして、誰にとっても、その最後の日が定かではないのが常なのです。しかし、赤ん坊の時、私たちは、少年になることを楽しみにしていました。少年になると、青年になることを、青年は成長することを、そして、若者になると、壮年になることを、そして、壮年は、老いていくのです。そのことが起こる

かどうかは確かではありませんが、いつもこれから期待することはあるものです。しかし、老人にはこれから先の人生の段階というものはありません。神が望まれたので私はこの町に人生の盛りのころにやってきました。そのとき私は青年でしたが、今や私は老いているのです。

というように、老いた自らを位置付けている。⁽³⁸⁾ 彼自身、身体の弱さと冬の寒さと老齢の寒さを重ね合わせて、ある晩年の書簡では、「私の身体の弱さと二重の寒冷、つまり冬と年齢の寒冷、(infirmitas corporis, et gementum frigus, id est, hennis et aetatis) があなたとお会いしてお話しするのを許さなかつたゆえに」と述べ、また最晩年の司教ノビリウス宛書簡では、

あなたが招いている儀式「献堂式」はとても重要ですから、私の弱さによって引き止められない限り私の弱い身体を快く引つ張っていきます。冬でなければそちらにうかがえるでしょう。私が若ければ冬を無視するでしょう。というのは若い人の熱情が冷酷な季節に

耐えるかそれとも夏の暖気が老齢の寒さを和らげるでしようから。しかし私は私が辛抱している寒冷なるこの老齡をもつてしては冬にそのような長い旅行には耐えられません⁽⁴⁾。

と告げている。

「老い」を見つめるキリスト教文学が少ないなかでアウグスティヌスの証言は貴重である。しかし、すでに壮年期にあつても「乏しく貧しく」慢性的に「病んでいる」自己の現実のあり方を見つめていたアウグスティヌスにあつて、老年の過酷な現実には耐えるということが急に降りかかった災難のように受け止められるはずもない。プラウンのように「若く壮健であつた頃」と「老いて衰弱していく頃」を鋭く対比して論ずるのは印象的であるだけに、より注意が必要である。なによりもアウグスティヌスの実相を見つめてそこで醸し出された思想を吟味していかなばならない。アウグスティヌスが「老いた」からそう考えるというのではなく、そう考えているアウグスティヌスであればこそ「老い」がそのように見えるということがあるのではないか。問題は死すべき人間の自然とか、時間世界の中でその

人間たちが造り上げる歴史といったものをどう見ているかである。手掛かりはすでに『告白』にある。すなわち、神と人に「仕える者」として自己の謎としての病を身に引き受ける自覚の中で、アウグスティヌスは『告白』の第一から二三巻で、永遠と時間のかかわりのうちに将来的「希望」として安息・平安を見つめていた。その相から見れば、「老い」という時間的現実が身に帯びれば帯びるだけ、よりしじみと自己の中心である「心(ego)」の底から至福(beatitudo)への志向が形をとつてくるのではないだろうか。このことはすでに『告白』で示されている。そして、「今は鏡を通して謎のうちに」見ていることが、かの日には「顔と顔を会わせて」見るといふ志向は、『告白』直後から書き始められ六〇代半ばに完成した『三位一体』のテーマとして引き継がれ、永遠のエルサレムを臨みつつこの世を「旅する協働体」のあり方こそ『神の国』(四二六年完成)でアウグスティヌスが伝えたものである。ここにはアウグスティヌスの思想の一貫性が見いだされるのである。最後に、同僚のポッシデウスが伝えるアウグスティヌス最晩年を紹介しておきたい。

彼の死を招いた最後の病気の時、彼はダビデの痛悔の詩編を書きとらせ、その紙片を壁にはらせ、病気で床に伏しているときに、それを見たり読んだりして、絶えず心行くまで熱い涙を流していた。彼は誰からも潜心を妨げられないようにするために、死ぬ一〇日くらい前、医者が診察に来るときと食事を運んでくるとき以外は、誰も彼の部屋に入らぬよう、そこにいたわれわれに頼んだ。ただ彼は、死ぬまでの一〇日間というものの、ひとりで、まったく祈りに没入していたのである。彼は、その最後の病気にいたるまで、教会で、神のみ言葉を、間断なく、熱烈に、力強く、健全な精神と健全な判断力をもって説き続けた。臨終の際も、彼の五体は無傷で、彼の視力と聴覚は完全にその機能を果たしていた。「立派な老境によく培われて自分の先祖たちとの眠りにはいった」のである。

ヒッポの図書館にはアウグステイヌス『全仕事 opera omnia』が残された。「彼は何も遺言を残さなかった。彼は神の貧者として、残すものを何も持たなかったのである。彼は、教会の図書館とそこにあるすべての本を、後

の人々のために注意深く保存するように、絶えず繰り返して命じていた……これらの書物の中に彼が常に生きているということを見出し得るであろう」とポッシデウスは言っている⁽²⁾。実際、全著作に関する『再考録』の完成（四二七年）、全『書簡』の編集作業、『説教』の編集整理作業（ポッシデイウスの『目録 indiculum』参照）等の仕事にたゆまず従事していたのがアウグステイヌスであった。時間の中で永遠をというアウグステイヌスの志向をよく示す営みであるう。

むすび

こうしてみると、貧困、病、老齡は、人間が本質的にか損なわれた存在、足りない存在であることを如実に示すしるしであることがわかる。問題は何が本質的に欠けておりの点で損なわれているかが理解されているかである。以上みてきたように、アウグステイヌスは「貧しい者」、「病んだ者」、「老いた者」として自己を体験してそれを語っている。彼は、病や老いを身に受けつつも、そうであるからこそそのような形で「仕える者」「癒しを受け入

れる者」真の幸福に希望を置く者」として一貫した生涯を全うしたのである。(岡山大学大学院教授)

註

- (1) P. ALLEN and E.MORGAN, Augustine on Poverty, in Pauline Allen, Bronwen Neil, and Wendy Mayer (eds.), *Preaching Poverty in Late Antiquity*, AKThG Bd.28, 2009, Evangelische Verlagsanstalt, Leipzig, 119-170.
- (2) このテーマについては、¹⁾「アウグスティヌスの「貧困」へのかかわりと「心」、²⁾出村和彦・上村直樹「転換期における「貧困」に関するアウグスティヌスの洞察と実践の研究」³⁾科研費報告書、二〇一二年、一―二四頁。なお⁴⁾Kazuhiko Demura, *Shaping the Poor: The Philosophical Anthropology of Augustine in the Context of the Era of Crisis*, in G.D.Dunn & W. Mayer (eds.), *Christians Shaping Identity from the Roman Empire to Byzantium*, 2015 Brill, Leiden & New York, 248-265 を参照。
- (3) 『説教』三五五・二(拙訳)。
- (4) 『説教』三五六・一三(拙訳)。

- (5) ポッシデイウス『アウグスティヌスの生涯』第一章(熊谷賢二訳)創文社。
- (6) 山口正美『ヒッポの司教 聖アウグスチノの会則——今日の修道共同体の靈性を求めて』サンパウロ、二〇〇二年九頁。『規則 *praecipuum*』における「一つの魂ひとつの心」については、¹⁾Kazuhiko Demura, *anima una et cor unum: St. Augustine's Congregations and his Monastic Life*, Pallen, W. Mayer, L. Cross (eds.), *Prayer and Spirituality in the Early Church*, Vol. 4, 2006, St. Pauls Publications, Sydney, 257-266 を参照。
- (7) 『告白』一〇・三八・六三、なお、『告白』の邦訳は山田晶訳(中公文庫)により、必要に応じて変えをせていた。¹⁾だいた。
- (8) 『告白』一〇・四三・七〇。
- (9) 『告白』八・五・一〇。
- (10) 『告白』八・六・二三。
- (11) 『告白』八・六・一五。
- (12) 『告白』八・二・二九。
- (13) 『告白』一〇・四・六。実は『告白』全体はそのような協働的交わりを前提に遂行されている言語行為である。
- (14) 『告白』一・一・一七。
- (15) 『告白』四・四・九。
- (16) 『告白』五・九・一六。なお、この記述は十五年ほど

たったのちのものなので「原罪のくびき (originari peccati vinculum)」というような表現が見られる。

(17) H・I・マルー『アウグステイヌスと古代教養の終焉』

(岩村清太訳) 知泉書館、二〇〇八年、二二〇―一頁。

(18) 『告白』六・一・一。

(19) J.J. O'Donnell, *Augustine Confessions* Vol.II Commentary, 1992, Clarendon Press Oxford, 334.

(20) さらに重篤なものとしてこれに続く長年の伴侶との離別とその直後の彼の癒されない行状を描写して、アウグステイヌスはこれを「だからだと血を流す」深刻な「私の魂の病 (mortuus animae meae)」と記述している (『告白』六・一五・二五)。

(21) その他、『書簡』にもアウグステイヌスの健康状態を報告する記述がたくさん見られる。「病気の後ヒツポを離れ……再び体調を崩し *perturbatio valetudinis*……」『書簡』一一八・五・三四 (金子晴勇訳) (四一〇年ごろ)「私は自分の健康状態もしくは身体的素質のゆえに寒さにはほとんど耐えることができませんが、この恐ろしい冬に受けたよりも大きな心痛を受けたことはこれまで一度もありません」『書簡』一一四・一、二 (アルピナ、ピニアス、メラニアへ。四一〇―一一年冬)【ただし四一一年夏には回復しドナティスト協議会で活躍する】。

(22) 『告白』八・九・二一。

(23) 『告白』一〇・三三・五〇。

(24) 『告白』一〇・四一・六六。

(25) 『告白』一〇・四三・六八。

(26) 『告白』一〇・四三・六九。

(27) 同上。

(28) 『告白』一・四・四「あなたは何者なのか」の問いの重要性は、宮谷宣史、荒井洋一がすでに指摘している。宮

谷『アウグステイヌス』講談社学術文庫、二〇〇四年、三二二―三二八頁、荒井『アウグステイヌスの探求構造』創文社、一九九七年、二二一頁。

(29) 『告白』一・五・五。

(30) ただし、第一〇巻で、その病が切迫した死に至るかもしれない重篤な症例である *Deser*として記述されている事象がある。それは、毎日誘惑の試練を受けていることを痛切に自覚するとき、「あなたは私たちにこのような事柄に関して慎みを命じ給う。命じたものを与え給え。あなたが欲したものを命じ給え」という祈りが叫びだされ、これを受けて「このような病 (II 疫病) からどの程度清められるか悟ることができない……」『告白』一〇・三七・六〇」という嘆息の際に用いられている。

(31) 本稿はいわゆるアウグステイヌスの「原罪」理解についての考察には立ち入らない。ただ、『告白』に基づいて、

罪が「病」という形で普遍的に現象するということから見えてくることに集中したのである。

- (32) 日本倫理学会(二〇〇七年新潟大会)での共通課題「老い」は先駆的。その後のモノグラフとして瀬口昌久「老年と正義—西洋古代思想にみる老年の哲学」名古屋大学出版会、二〇一一年。ただしこれまで、アウグステイヌスの老年に焦点をあてた研究はブラウン以外知らない。P. Brown, *Augustine Of Hippo: A Biography*, 1967, 2001, Faber & Faber, London (P・ブラウン『アウグステイヌス伝』上・下、出村和彦訳、教文館、二〇〇三年)。

(33) 『説教』八一・六、ブラウン、下二四頁。

(34) ブラウン、下六四頁。

(35) ブラウン、下二三頁。

(36) ブラウン、下三二頁。

(37) ブラウン、下三二頁。

(38) 『書簡』二二三・一(金子晴勇訳)。

(39) 『書簡』二二九・一(金子晴勇訳)。

(40) 『書簡』二六九(金子晴勇訳)。七五歳(四二九―四三〇年頃)のもの。

(41) ポッシデイウス、第三一章。

(42) ポッシデイウス、第三〇章。

についての「徳」理論の成立と変容」および基盤研究B「人文学研究とケアの現場との協働による新たな〈老年学〉の構築」による研究成果の一部である。

*本稿は科学研究費助成金、基盤研究C「古代末期の富と貧困